

<全体分析>

試験時間

90 分

解答形式

記述式と客観式の併用。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

- ・大学統合後の初めての入試であったが、「東京工業大学の出題形式」を踏襲している。
- ・2010年度以降、「1,000語を超える長文」が出題されるようになり、この傾向は定着している。ただし、長文2題の総語数は年度によって差があり、2014年度から2025年度までの総語数は、「2,339→3,046→2,139→2,854→2,312→3,092→3,062→3,091→3,348→3,496 (過去最多)→3,020→3,334」で推移しており、3,000語を超えるのは7年連続となった。
- ・2024年度は分量的な負担が減り、設問も取り組みやすいものが多かったが、2025年度は分量が増えたことに加えて、英文自体の語彙レベルの難度も高くなったことで、「難化」したといえる。
- ・解答時間の目安は、大問Ⅰが50分程度、大問Ⅱが40分程度と思われるが、3,000語超の英文量を試験時間内で読みこなすにはかなりの速読力が要求される。

出題の特徴や昨年との変更点

- ・長年にわたって「大問2題」という構成が継続しており、2行程度の下線部和訳・英訳および内容説明が中心という設問形式に変動はない。また、「超長文」での出題に伴い、内容一致や空欄補充などの客観式での出題形式も定着している。
- ・内容説明2問は、大問Ⅰが「85字以内」で、大問Ⅱが「70字以内」でまとめるように指示されている (ちなみに、2024年度は「80字以内」と「70字以内」で、2023年度は「70字以内」と「60字以内」であった)。例年同様、該当箇所の的確な把握ならびに制限字数内にまとめる日本語の表現力が要求されるので、得点差が付きやすい設問である。
- ・2020年度から6年連続して、「本文中の5つの空欄に、一括して与えられた5つの文 (ただし、2025年度は「文の一部」を含む) を埋める」という空欄補充問題が出題されている (2020年度は1つの段落内での出題であったが、2021年度以降は本文中の5つの段落に分散されている)。なお、2024年度では、大問Ⅱで「本文中の4つの空欄に、一括して与えられた4つの語句を埋める」問題が出題されたが、2025年度では、大問Ⅰと同じ「文補充」の形式で出題されている (5つの空欄に対して5つの選択肢が一括して与えられている)。

その他トピックス

- ・2025年度については、大問Ⅰと大問Ⅱの英文のワード数の差が少なくなっている (大問Ⅰが80点で、大問Ⅱが70点という配点は2024年度と同じ)。
- ・2021年度以降、和文英訳は大問ごとに1問が出題されており、全体で「下線部和訳4問と和文英訳2問」という組み合わせが続いている。
- ・2024年度は新傾向問題として「タイトル選択」が出題されたが、1年限りで姿を消した。
- ・2025年度の大問Ⅱの設問6では「アナロジー」の要素を含む内容一致問題が出題された (新傾向)。
- ・定番となっている最後の「内容一致」は、2023年度から3年連続して、大問Ⅰが「10の選択肢から一致するものを3つ選ぶ」形式で、大問Ⅱは「8つの選択肢から一致するものを2つ選ぶ」形式である。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	読解総合	「計測 (する能力) が科学の進歩に果たした歴史的役割」 (1,833 words) 和文英訳 内容説明 下線部和訳 空欄補充 (選択) 内容一致 (選択)	<ul style="list-style-type: none"> ・英訳：文構造 (形式主語構文や共通関係) はわかりやすいので、個々の表現 (特に「対象物と同じ高さの計測道具」の部分) の訳出で差がつくと思われる。 ・内容説明：下線部にある cognitive trade-off がポイントで、設問の指示にあるように、「チンパンジーと人間の能力の違い」を踏まえた答案にまとめる。 ・和訳：下線部(3)はやや複雑な文構造で、まずはその正確な理解が前提となる。一方、下線部(4)は文構造に従って素直に訳していけばよい。 ・空欄補充：代名詞などの「目印」となる表現がわかりやすく、埋めやすい (「全問正解」したいレベル)。 ・内容一致：英文中の「2人の人物」に絞った設問で、2問とも該当箇所がわかりやすく、解きやすい。 ・内容一致：(例年よりも) 紛らわしい選択肢が多く、該当箇所を的確に見つけられるかがポイントとなる。 	やや難
II	読解総合	「ファームフリーフード (農地を必要としない食品) が地球を救う」 (1,501 words) 下線部和訳 内容説明 和文英訳 空欄補充 (選択) 内容一致 (選択)	<ul style="list-style-type: none"> ・本文が 2024 年度よりも「約 300 語」増えている。 ・和訳：2問とも大問 I より易しめで、文構造は把握しやすい。下線部(1)は let alone 以下の処理がポイントとなる。下線部(2)は Nor で始まることから、「否定の内容」であることを意識して、taking us anywhere, except ... の部分を訳す必要があり、意味が通る和訳になるようにしたい。 ・内容説明：設問文の指示が具体的で、その「誘導」に従ってまとめればよいが、下線部を含む第 13 段落の内容をどこまで [どのように] 書くかで悩んだと思われる。次の第 14 段落の具体例のほうがまとめやすいので、両方をバランスよく仕上げるのに苦労する。 ・英訳：文全体の構造が読み取れる答案に仕上げるのが基本となるが、前半の内容は平易なので、後半 (特に「比べものにならない」の箇所) の訳出がポイントといえる。 ・空欄補充：(「文補充」は大問 II では初めての出題であるが) 大問 I 同様、指示語やキーワードとなる名詞が手がかりになり、埋めやすい (ここも「全問正解」したいレベル)。 ・内容一致：第 5 段落第 4 文の all farming except fruit and veg production is likely to be replaced by ferming から類推する。 ・内容一致：The author で始まる選択肢が 4 つあり、そのうちの 2 つが正解となっている。選択肢の 4 が正解であることはわかりやすいが、5 については本文との照らし合わせを慎重に行う必要がある。 	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は 5 段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・(過去の東京工業大学の入試問題においては、年度により、出題傾向に多少の変化はあったものの)「下線部和訳」「下線部英訳」「内容説明」が、出題における「三本柱」であることに変わりはないので、文脈を迅速かつ正確に把握しながら英文を読み進めていく練習を積んでおくことが不可欠である。
- ・超長文による出題が定着しており、空欄補充や内容一致などの客観式の設問の比重も高いといえる。例年、最後の内容一致には数多くの選択肢が用意されており、それぞれの内容を本文と照合していくのは面倒な作業ではあるが、選択肢が本文の内容理解を助けてくれるという側面もあるので、選択肢を“味方”につけながら読み進めていくとよいだろう。
- ・英作文については、基本例文を確実に覚えて、それを十分に使いこなせるまでに磨きをかけておくこと。例年、本文中に参考となる表現があるので、それらを参考にしつつ、ケアレスミスをしないように答案の作成には細心の注意と工夫が必要になる。